



『エッセー』 食人種の章におけるOccidentの解釈

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺迫, 正廣 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00009979">https://doi.org/10.24729/00009979</a>

# 『エセー』食人種の章における *Occident*の解釈

寺 迫 正 廣

## 序

他者論を考える際、モンテーニュの『エセー』の食人種論はよく引用される。そこには、さまざまな面でそれまでに(ヨーロッパが)知り得た人間とは異なる存在として、南アメリカの先住民の生のありようが論じられており、野蛮対文明の観点、比較文化の観点、異文化交流の観点など、さまざまな論点を提供するからであろう。また「cannibales=食人種」という一瞬ひるむような言葉を持ち出し、その語がになう存在を論じて、モンテーニュがこの人々の代名詞の如き「野蛮」を否定し、むしろこれとは正反対概念としての〈bons sauvages〉の観念を提示したことから、さらに後世の議論を呼び起こしたことも影響していよう。

この論は、ヨーロッパに連れてこられた数名の現地住民から直接聞いた話<sup>1)</sup>、現地に住んだことのあるヨーロッパ人でモンテーニュが雇っていた人物<sup>2)</sup>から聞いた伝聞、文献資料<sup>3)</sup>、およびそれを元にした推論とで構成されている。モンテーニュ自身が自分の目で現地を見て、現地の人々と会って、研究したわけではないが、現在のブラジルに相当すると考えられる「南極フランス」地域に住む先住民の姿が、その生活情景をある程度イメージできるように描かれている。ただ、かれらの自然とともにある姿、かれらの戦争の理由、その闘い方、捕虜の扱い方などすべてが美化される傾向にあり、そこから出てくる〈bons sauvages〉の観念に批判的な捉え方が出てきたとしても不思議ではないし、実際にそのような疑問は提示されている<sup>4)</sup>。ただ、ギリシア古代に存

在したとされる黄金郷のごときものを自分の同時代に見いだして、そのこと自体を喜んだ面もあるし、ヨーロッパが文明の名において、これらの住民を野蛮人扱いし、教化の美名のもとに、その習慣・風習を破壊し、つまりはかれらの文化を破壊しようとしているさまを見て義憤にかられた結果、この章の執筆を思い立ち、そのことが必要以上に美化することになったと考えることは十分に可能であろう。

ただ、モンテーニュの関心と気掛かりはあくまでも、かれが現実に生きているフランスの社会のありようであった。そのフランスでは周知のように、宗教の故に、王位継承権故に戦争の絶えない状況にあり、その戦争を背景に独断や偏見が横行し、傷つけ合い、殺しあう人々を目の当たりにする日々である。かれ自身捕らえられ、投獄の憂き目にあったこともあるほどだ。地方都市ボルドーの裁判官として、また市長として新旧キリスト教の対立の渦中を生き、また宮廷やパリの路上の喧噪のなか、フランスの社会、同胞を眺めわたすとき、文明というものの実態がなんであるかを思い知らされていた。その折りもおり伝え聞く「新世界」の住民の暮らしは、フランスの今との隔たりの大きさに驚嘆せずにはおれないもので、そこからフランス(ヨーロッパ)を逆照射するためのかっこうの材料をかれに提供した。そして、未開と言われつつ、しかし、きちんとした文化を持ち、平和にかつ充実して生きるこれらの人々に比して、ヨーロッパの「文明社会」はどうなっているのかと問う。

そうした観点から読むとき、ひとつ問題に思えてきたのが、この章における *Occident* (*occident*) という言葉の使い方である。筆者が版本としてよく使う Puf 版では、「食人種」の章に唯一出てくるこの語は大文字で始まっている。この語はむろん、現代では小文字で始まれば「西方」という意味であり、大文字ならば「西方の国」、「西洋世界」という意味である<sup>5)</sup>。この章ではどうであろうか。翻訳はどうだろうか。私が見たものはみな「西方」と訳している。上に示したように Puf 版では大文字なのであるから、「西洋」ということになろうが、しかし、身近なフランス人教師数名に解釈を求めても、すべて「西方」と解説した。翻訳者の解釈どおりである。理由は、16世紀には正書法がまだきちん

と決まっておらず、大文字か小文字かで意味内容に大きな違いはない、というものだ。確かに、この箇所では「西方」と解釈した方が意味が通りやすいのも事実である。であるから、大文字であるか、小文字であるかについて、あまり深く詮索しても無意味なことかも知れない。この時代の綴字法の研究書も、大文字の使い方がどう変化したか一般的に述べてはいるが、今われわれが問う問題には何も触れていない<sup>6)</sup>。しかし、モンテーニュは果たして本当に恣意的に大文字にしたり、小文字にしたりしているのだろうか。

そこで試みに手元にある他のエディションを当たってみると、『エッセー』全体で7回登場するこの語は、かならずしも表記が統一されていないことがわかった。少なくとも、この食人種の断章においては、エディションによって異同が認められる。そこで、他のケースも調べることにより、手がかりがつかめる可能性が出てきた。異同が相当に大きければ、それは一方で、正書法が確立されていないので恣意的であるという解釈の補強になるだろうが、他方、その異同にはなんらかの意図が込められている可能性も出てくるのではないか。後世が批評校閲版を出すときに一番の問題としなければならないのはモンテーニュ自身が生前、どのような表記を選んだかを尊重することであるから、底本がひとつに決まっていれば、後世のエディションに異同が出るのは奇妙ということになる。『エッセー』の場合、今日ではモンテーニュの手書きの加筆が残る「ボルドー本」(後出)に準拠するケースが多いと思われる。われわれも、この本を中心に考察をすすめたい。いずれにせよ、大文字か小文字かの問題は単なる表記の相違ではなく、単に意味がとおりやすい、ということで放置できない問題をはらむようにも思われる。そこで、まず『エッセー』の全体について、*Occident(occident)*の表記がどうなっているかを調べ、そのうえで改めて、この断章のケースを考え直してみたい。

## 1. エディションの比較

*Occident(occident)*とその対の語*Orient(orient)*の両方について調べてみよう。手元にある版は、

- ① 1580年初版のDaniel Martin氏による写真複製版(これを①と表記する)<sup>7)</sup>。
- ② 「ボルドー本」と呼ばれる、1588年版(3vols) (モンテーニュによる加筆が加えられたもの～ボルドー市立図書館蔵)のファクシミリ版(これを②と表記する)<sup>8)</sup>。
- ③ Pléiade版(Maurice Rat版) (これを③と表記する)<sup>9)</sup>。
- ④ Puf版(Saulnier版) (これを④と表記する)<sup>10)</sup>。
- ⑤ Intégrale版(現代表記版) (これを⑤と表記する)<sup>11)</sup>。

グルネー嬢による1595年版や、今世紀初頭のボルドー市版も見たいところだが、手元にあるもので、初版とボルドー本の表記が確認できるので、最低の条件は満たしていると思われる。とりあえず、上記5つの版の扱いを見てみたい。大文字表記をL、小文字をSであらわす。該当語が存在しない場合、－で示す。

それでは、ふたつの単語の登場箇所を確認しよう。まず*Occident(occident)*から見よう。登場箇所を第1巻15章なら1-15のように示す。また同一の章に複数回登場する場合は2-12a、2-12bのように示す。ページ数(数字の後のA、B、Cは執筆年)はPuf版<sup>10)</sup>による。

- (1) 1-31: les maudites, du côté de l'Occident. (208A)
- (2) 1-32: de coin en coin, et d'orient en occident, ils ne... (215A)
- (3) 2-12a: Theophraste, alloient ils en occident, quand ils tiroient... (571A)
- (4) 2-12b: que nous y voyons, changeant d'Orient en Occident.

(572C)

(5) 3-08 : sera-ce en fin? L'un va en orient, l'autre en occident.

(926B)

(6) 3-11a : trois le virent lendemain en occident, à cette heure,

(1032B)

(7) 3-11b : heures passe, quand et les vents, d'orient en occident?

(1032B)

Orient(orient)の方も同じように抜き出そう。こちらはこの語以外にlevantも用いられるので、関連語として上げておく。またorientの綴りもある。

(1) 1-15 : que les princes d'Orient et leurs successeurs,... (68A)

(2) 1-31 : quelques autres peuples d'Orient, qui beuvoient... (207A)

(3) 1-32 : de coin en coin, et d'orient en occident, ils ne... (215A)

(4) 2-12a : et plantent leur loge à l'Orient, sans connoistre... (455A)

(5) 2-12b : qui a sa province en orient et son credit... (534B)

(6) 2-12c : alloient ils en occident, quand ils tiroient en levant...

(571A)

(7) 2-12d : que nous y voyons, changeant d'Orient en Occident...

(572C)

(8) 3-08 : sera-ce en fin? L'un va en orient, l'autre en occident...

(926B)

(9) 3-11a : un tel jour en levant ; trois le virent lendemain en occident

...

(1032B)

(10) 3-11b : heures passe, quand et les vents, d'orient en occident?...

(1032B)

*Occident(occident)*の大文字／小文字比較表

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
①	S	S	S	—	—	—	—
②	L	S	S	S	S	S	S
③	L	S	S	L	S	S	S
④	L	S	S	L	S	S	S
⑤	L	L	S	S	S	S	S

*Orient(orient)*の大文字／小文字比較表

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
①	L	L	S	S	—	S	—	—	—	—
②	L	L	S	L	S	S	S	S	S	S
③	L	L	S	L	S	S	L	S	S	S
④	L	L	S	L	S	S	L	S	S	S
⑤	L	L	L	L	S	S	S	S	S	S

両語の対応表は以上のとおりである。*Occident(occident)*の場合、7回の登場のうち、1580年の初版では3箇所のみで使われ、後の4回は88年版およびその後の加筆部分に見いだされる。この表からわかるように、われわれが問題とする(1)すなわち、第1巻31章の場合、初版は小文字で、88年版では大文字に修正されている。モンテーニュは88年版の1冊を手元に置き、加筆を続け、問題の*Occident*の出てくるページにも加筆を施している。しかし、初版段階の小文字がこの版で大文字に変わっている点については、何ら手を加えようとはしていない。

(2)(第1巻32章)では、初版もボルドー本も小文字。Intégrale版のみが大文字に変えている。これ以降(3)～(7)については初版とボルドー本はいずれも小文字である。

(4)(第2巻12章b)では、Pléiade版とPuf版が大文字を採用している。

Intégrale版は現代語表記を採用した版であり、他と異なるものが多いかと予想されたが、意外に異同は少なく、初版、ボルドー本などの、モンテーニュの表記が尊重されているようにも見える。このことは意味があるのだろうか。

*Orient(orient)*の方はどうか。こちらも予想したほどの大きな異同は認められない。(4)すなわち、第2巻12章にひとつ、初版と他の版で異なる語がある。同じ章の(7)にもうひとつ、初版、ボルドー本に従わず、Pléiade版とPuf版が大文字になっている箇所がある。現代表記のIntégrale版は、1カ所を除くとみな、ボルドー本に従っている。

これから*Occident(occident)*のすべてについて、この語を文脈の中において考え、大文字と小文字のありかたとその意味内容を考えてみたい。*Orient(orient)*についても全部検討すべきだが、*Occident(occident)*と対で使われているケースも多く、それ故、両語を同時に考察できる箇所もあり、紙幅も限られるため、こちらは異同のある箇所など、要所を検討することにしたい。

## 2. *Occident(occident)*の異同の検討

1) 第1番目が、われわれがテーマとしている第1巻31章の*Occident(occident)*であるが、これについては、章を改めて検討することとし、上記(2)(第1巻32章)から始めよう。ここは初版、ボルドー本ともに小文字で、現代表記のIntégrale版のみが大文字表記を採用している。その部分を訳出してみよう。

人の知らないことほどもっとも堅く信じられる。錬金術師、予言者、占星師、手相見あるいは医者[...]のように、作り話を語る輩ほど自信に満ちた者はない。絶えず、神意を解釈し、記録する一群の人々も敢えてこの中に加えたい。この人たちは何かが起こるたびに、その原因を見だし、隠された神意のなかに御業の知り得ぬ動機を見つけると言う。そして常に、多様で矛盾する事柄に、こっこの隅からあっちの隅へ、orientからoccidentへ振り回されるにもかかわらず、ボールを追うのをやめず、同じ鉛筆で白く描

いたり、黒く描いたりする。(下線筆者)

人間の判断がいかにいい加減であるかを説くくだりだが、モンテーニュ一流の批判眼が、予言者や、かれのきらった医者などとともに、当時最高の学識ある存在とみなされるはずの神学者にまで及んでいる、面目躍如たる件である。文章の流れから、ここは「東」と「西」と解釈するのが自然で、特に大文字にする理由は見あたらないように思われる。モンテーニュがボルドー本で示している小文字表記に従うのが適切だろう。Intégrale版がなぜ、ひとり大文字にしたのか、真意を測りかねると言わざるを得ない。

2) 上記(3) (第2巻12章a)の箇所はいずれの版も小文字表記で、異同はないが、どのような文章のなかで使われているか、見ておこう。ここは学者の理論がどれほど不確実に満ちたものであるか、理論と事実がどれほど相容れないものであるか等について論じた部分である。モンテーニュが自然学者を皮肉っている場面である。

そうだとしたら、テオフラストスの法則に従って航海した人がorientを指して行ったのに、実際はoccidentへ行ったのはなぜでしょう。横の方へそれたのですか、あるいは後ろへ進んだのですか。(下線筆者)

ここは、場合によっては「東洋」と「西洋」と理解することも可能であろう。ただ、場面は海上で、船を進める方角が問題となっていることから、小文字のとおり「東」、「西」として理解して特に問題は生じないと思われる。初版、ボルドー本もそろって小文字であり、この解釈でよいだろう。

3) 上記(4) (第2巻12章b)についてだが、これは初版本にも88年版にも存在せず、ボルドー本へ1588年以降加筆された部分にある。ボルドー本のページ余白にびっしりと書き込まれたモンテーニュの手書き草稿は読みとり易いと

は言えないが、この両語については、ファクシミリ版でも、はっきりと読みとれる<sup>12)</sup>。ここも*occident*と*orient*がセットで登場している箇所属し、両語ともすべて小文字で書きこまれているのがわかる。にもかかわらず、なぜPléiade版(Maurice Rat版)とPuf版(Saulnier版)は大文字表記に変えたのであろうか。

まず、この部分を訳出してみよう。

...(c)われわれが世界と呼ぶこの大きな物体はわれわれが判断するものとは全然別物であるというのがより真実ではないかどうか。

プラトンは世界があらゆる方向にその顔を変えると言っている。空も星も太陽も時折り、*Orient*を*Occident*に変え、われわれが見ている運動を逆転させると...(下線筆者)

ここは世界の運動のことを問題にしており、「東」と「西」に解釈する方が自然で、「東洋」と「西洋」を当てるのは、文脈をどう解釈し直しても苦しい。両版がプラトンの原典の扱いから大文字にした可能性は残るが、しかし、仮にそうであるにしても、Puf版の編者Saulnierは、ボルドー本に依拠した編集を行ったと明記しているのだから、いたずらに表記を変えるべきではなかったのではなかろうか。理由も付されていないし、現代の読者に敢えて大文字表記で読ませるだけの積極的理由が見あたらないのだから、なおさらである。ここはモンテーニュの手書きの指示にしたがって、小文字にしておくのが最善と言わざるを得ないのではないか。その意味でIntégrale版の判断の方が評価されると言えよう。

4) (5)、(6)、(7) (第3巻の3カ所—第8章と第11章のaおよびb)はいずれの場合も、ボルドー本はじめ全エディションが小文字においている箇所である。異同はまったく見あたらない部分だ。そこでまとめて見ていきたいが、まず(5)の「話し合う方法について」の断章は、文字どおり、真理探究には議論が有効であること、しかし、対話者を選ばなければ真理探究どころではな

いとし、対話者の資質が問題となると述べ、結局、同時代の学者たちの混迷ぶりを強く批判する内容となっている。

きちんとした歩みや歩調を持たない者と真理の探究に出かけて何になるろう。[...]その結果はどういうことになるか。一方はorientへ行き、他方はoccidentへ向かい、本筋を見失い、偶発的事項の中に紛れこんでしまう。(下線筆者)

ここは文脈の中において考えても、「東」と「西」と解釈して、曖昧さは残らないように思える。真理へ至る本筋を見誤った者の右往左往する姿が見えるような描き方である。次に(6)と(7) (第11章のaおよびb)だが、いずれもlevantとorientと対のかたちで、同じ箇所が登場する。根拠薄弱な議論、超自然の事柄をいたずらに信じ込んだり、吹聴することを批判した文章のなかに出てくるものだ。

私はこんな話をうんざりするほど耳にした。「3人の者がある日、levantにその男を見た。3人は翌日のある時刻、ある場所で、そのような服装をしたその男をoccidentに見た。」実際、私だったらこんな話は信じないだろう。ふたりが嘘をついていると考える方が、ひとりの男が12時間で風とともにorientからoccidentへ移動したと考えるよりも、ずっと自然で、ずっと真実らしいと思う。(下線筆者)

この箇所も常識的には順に「東」、「西」、「東」、「西」の意となろう。ただ、これらがみな大文字で、*Levant*、*Orient*、*Occident*となっていれば、「東方の国」、「西方の国」と考えることは、文脈上十分に可能であり、むしろその方が単に、方角の「東」、「西」よりも、見聞きしたことの非現実感が大きいだけに、モンテーニュの意図することがらがよりよく伝わるとも言える。後は大文字、小文字の扱い方の自由度の問題となる。

ここまで見てきたものは、初版、ボルドー本ともoccidentをすべて小文字に置いており、それらは概ねみな「西」と解釈してよかったことから、モンテーニュ

が小文字と大文字を使い分けている可能性は否定できない。問題の第1巻31章の*Occident*をどう解釈するか、こうした点とも関連してこよう。

### 3. *Orient*(*orient*)の異同の検討

この語については*Occident*(*occident*)のところで、一緒に検討したものもあり、ここでは要点だけを見ておくことにする。

1) まず(1) (第1巻15章)のケース。ここは包囲戦の攻防における武将の心理を例に語りつつ、事に臨む人の意識のありようを論じた箇所、大文字の*Orient*が登場している。

それは(無謀な突入は)*Orient*の王侯や今も現存するその後継者たちが用いる傲慢、尊大、粗暴きわまりない命令を含んだ勸告状や挑戦状の形式に見られる。(下線筆者)

ここは初版、ボルドー本はじめ全エディションが大文字にしている。文意から考えても、ここは「東洋」と訳すべきであり、関根訳など日本語訳もそのようになっていて、文意と語のかたちが整合しているので、両義性はまったく見られないと考えて差し支えないであろう。

2) われわれが問題にする*Occident*の語の存在する第1巻31章の「食人種について」の断章には*Orient*も登場している。初版、ボルドー本ともに大文字におかれ、その後の版もそれに従っているケースである。訳を見よう。

かれらは(食人種たちは)太陽とともに起き、すぐに一日分の食事をとる。というのも、かれらはこの時以外には食事はとらないのだ。食事の時、飲み物をとることもない。*Orient*のいくつかの民族について、スイダスが「かれらは食事の時とは別に飲む」と述べ

ているとおりである。(下線筆者)

ここも上の(1)と同様に、解釈に迷うことは、まずない。文脈から見ても、全エディションが大文字で統一していることから、明確に「東洋」と解釈して何の問題も見あたらないと思われる。

3) (3) (第1巻32章)のケースは、*Occident(occident)*の項で検討した(1)と同じ箇所にあたり、Intégrale版のみが他と異なり、大文字を採用している箇所である。これについては特に付記することはない。また(7) (第2巻12章d)についても*Occident(occident)*の(3)と同じ箇所にあたり、Pléiade版とPuf版のみが大文字を採用している箇所、これについても付記することはない。

4) モンテーニュ自身が初版の表記をボルドー本(88年版)で変えた箇所(4)を見よう。第2巻12章で動物の能力に関する長い列挙の途中、鳥類の巣作りのすばらしさを述べた部分である。訳してみよう。

鳥たちがその宮殿を苔やうぶ毛で敷きつめるのは、雛のひ弱な足をそっと受けとめ、楽にさせてやれるよう、予測してのことではないのだろうか。雨風を避け、その巣を *Orient*に向けて作るのも、風のさまざまな吹きかたや、ある風が他の風よりも健康によいということを何ら知らずに、そうするのだろうか。(下線筆者)

ここは雨と風の吹く方向が問題となっており、「東」と解釈するのが自然であろう。にもかかわらず、初版段階の小文字を88年版で大文字に変えたのは不可解と言わざるを得ない。そうすると、これはこの時代、大文字と小文字の区別については、まだそれほど厳密ではなかったという解釈のひとつの証拠を提供していることになるだろうか。ただ、ここでそう断定するのは、逆のケース、すなわち、大文字と小文字の扱いが今と同じになっているケースが数多

いことから考えて性急のように思われる。

5) その他については、ボルドー本を含め全エディションが小文字を採用しており、文脈を考慮して、すべて「東」と解釈すべきところである。

以上、*Occident(occident)*、*Orient(orient)*について、各エディションにおける異同と、それぞれのケースにおける語義とを考察したが、初版とボルドー本においては1件を除いて、小文字の場合は「西」と「東」、大文字の場合(とりあえず*Orient*のみだが)、「東洋」と解釈するのが妥当であることが判明した。したがって、16世紀における大文字／小文字の扱いは、少なくともモンテーニュの『エッセー』においては、必ずしも恣意的ではなく、使い分けが行われていた可能性を指摘できるのではないだろうか。この件に関しては、したがって、モンテーニュが死の直前まで手元において、読み返しては加筆し、加筆しては読み返していたボルドー本(88年版)にしたがうのが正しいと判断すべきであって、後世が、それを無視して、編者の意志で勝手に大文字にしたり、小文字にしたりするのは、大きな過ちであると言わねばならないのではないか。しかし、結論を出すのはまだ早い。肝心の「食人種」の章の*Occident(occident)*の問題を考察するのが先であろう。章を改めてそれを検討しよう。

#### 4. 「食人種について」の断章における*Occident*

よく知られているように「食人種」の断章は「新大陸」の住民の平安と幸福が、「こちらの世界の退廃を覚えること」によって、甚大なる被害を受けつつあることを知ったモンテーニュが<sup>13)</sup>、この「半ズボンなどはいっていない」人々がすばらしい判断力を持ち、豊かな詩才を有し、何よりも人間の真価を示す心と魂の強さを持つことを明らかにしようとしたものである。と同時に、この人々を「野蛮」の一語で批判し、「文明」を対置し、これを教化しようとするヨーロッ

パ人がいかに自己について無知であることを示し、「野蛮」の名はむしろヨーロッパ人の方にこそ冠せられるべきであると主張したものである。そのことをモンテーニュの文章で明らかにするために、ここで2、3の文例を引いておこう。

1) 私はこのような行為に恐ろしい野蛮さを見いだすからではなく、われわれがかれらの過ちを非難しつつ、自分たちの過ちにはまったく盲目であることを悲しく思うのだ。私は死んだ人間を食するよりも生きた人間を喰らう方がよっぽど野蛮だと思う。まだ十分に感覚の残っている身体に責め苦を与え、拷問で引き裂き、火炙りにしたり、犬や豚に噛み殺させたりする方が(これらのことは書物で読んだだけでなく、実際にこの目で見て、なまなましく覚えている。しかも昔からの敵だけでなく、隣人・同胞に対しても行われているのを見ている。しかもさらに悪いことには、敬虔さと宗教の名において行われるのを見ている。)、死んでから焼いたり食ったりすることよりもずっと野蛮だと思う。(Puf : p.209)

2) これらの捕虜は何をされようと、降参するどころか、逆に2、3カ月監禁されている間も楽しそうな顔を持ち続ける。かれらは勝利者である主人に対し、早く試練にあわせろとせき立てる。議論を挑み、悪口を言い、その卑劣さをなじり、自分たちが勝った戦いの数を並べ上げる。私はある捕虜のつくった歌を持っている[...]それは少しも野蛮さを感じさせない歌だ。またかれらの死の瞬間を描いた絵には、捕虜が自分を殺そうとする人の顔に唾をかけたり、洗面をつくってみせたりする様子が描いてある。事実、かれらは最後の息を引き取るまで、言葉と顔の表情で相手に挑み、ずっと罵倒し続ける。これがまさしく、われわれに比べて野蛮だと言われる人々である。まったく、かれらが本当に野蛮なのか、逆にわれわれの方が野蛮であるかいずれかに違いない。かれらとわれわれのあり方には非常に差があることは確かなのだから。(Puf : p.212)

上記2例からも、モンテーニュが「野蛮」という形容語がいずれの地域によりふさわしいと考えているかは、明かであろう。しかもヨーロッパの、フランスの野蛮行為は「敬虔さと宗教の名において行われる」だけに一層たちが悪い。

こうした点を踏まえて、問題の箇所を見てみよう。日本語に訳出しよう。

今、あちこちで、とりわけ私の家で、かれらの寝具、綱、木剣、戦争のときに手首を覆った木の腕輪、一端がだだ広く開いてそれを叩いて舞踊の拍子をとったという大きな杖などの見本を見ることができる。かれらは全身の毛を剃る。しかも石か木の剃刀だけでわれわれよりもずっときれいに剃る。かれらは靈魂不滅を信じ、神にふさわしい靈魂はlevantに、呪われた靈魂はOccidentに宿ると信じている。

かれらの間には僧侶か予言者みたいな者がいるが、山に住んでいてごくたまにしか皆の前に現れない。かれらがやってくると多くの村が一緒になって盛大なお祭りと荘厳な集会を催す。[...]この予言者は皆の前で徳と義務を説く。しかしその徳の教えは戦争における果敢と妻に対する愛情のふたつだけである。(下線筆者 Puf: p.208)

モンテーニュは事例蒐集癖の持ち主で、文字で書かれた古今の事例を恐るべき熱心さで集め、それを『エッセー』に次から次へとつぎ込んだ<sup>14)</sup>。かれの蒐集癖は格言、金言のみならず、事物にも及んだらしいことが、この一節でよくわかる。「新大陸」住民の使用する大小さまざまな道具を集め、展示の真似事のようなことをしていたらしいことが、この文に明らかである。

引用文は、「新大陸」住民の暮らしぶりを思いつくままに(作戦か?)紹介している箇所の一部である。その流れの中で、いかにも唐突に「かれらは靈魂不滅を信じ、[...]呪われた靈魂はOccidentに宿る...」という文が挿入される。段落が切りかわるでもなく、いきなり、この文となり、しかも、その主題が大きく展開されることもない。そして、この唐突の観を免れない一文の中に、われわれが、ここに問題にしている語が登場するのだ。

ここは初版(1580年)では小文字のoccidentとされているのだが、モンテーニュ生前の最後の版であるボルドー本では大文字のOccidentとなっている。このことをどう解釈すべきだろうか。ここまでに検討してきた例では、occidentはみな小文字に置かれ、その意味内容は方角を示す「西」であった。この箇所だけが唯一88年版で修正され、大文字になっているわけだ。一方、これに対して

*Orient*(*orient*)は初版段階で2つが大文字に置かれており、それは文脈上、「東洋」とすべき箇所であった。88年版で大文字になった第2巻12章aの語は「東洋」とするには無理があり、「東」と解釈せざるを得ない。この例外は残るが、先にも見たように、基本的にはモンテーニュが生前に処置したかたちで考えるべきだと思われる。

こうしたことを総合して考える時、問題の*Occident*はどう解釈すればいいのだろうか。基本線にしたがえば、上記引用下線部は「かれらは靈魂不滅を信じ、神にふさわしい靈魂は*levant*に、呪われた靈魂は西洋に宿ると信じている」(下線筆者)となる。*levant*=*orient*と考えるとして、「東洋」の意味もあるが、小文字であることと文脈を考慮すれば、やはり、「太陽が昇る方」となろう。こうしたことから、この「西洋」はやはり奇異であろう。しかし、モンテーニュが故意に大文字にしたと考えればどうだろう。「新大陸」住民の口から「西洋世界」という概念が飛び出すことは考えにくい。しかし、モンテーニュが大文字と小文字の意味範囲の違いを認識した上で、敢えて大文字を採用し、住民に言わせるかたちを取ったとすれば、これは先進文明ヨーロッパへの激烈な批判となる。そしてその毒気を隠すように、この語は、住民の生活のあらましを述べる件、すなわち、物議をかもし可能性の低いところに何気なく置かれているように見える。それだけに、逆説的にモンテーニュの強い批判の意が込められているようにも思われる。

むろん、これは推量の域を出ない議論である。しかし、『エッセー』の他の箇所でのこの語の使い方との比較検討を踏まえての推量であり、ひとつの解釈可能性として、選択肢とみなすことは可能ではないだろうか。

## 結 び

事物はおそらく、それ自身の重さ、寸法、性質を持っているだろう。だが、われわれの精神は、われわれがとらえたその事物を、自分の解釈するとおりに

切り刻む。これはよく知られた、『エッセー』の言葉である<sup>15)</sup>。事物を事物として直視しようとせず、思い込みで判断する傾向への批判であろう。だが、モンテーニュ自身、事物の本質に到達できるとは考えていないのもまた事実である。エッセーの試みは、絶えず続けられ、決してゴールのない試みであった<sup>16)</sup>。したがって、上の文は単なる批判だけではない。我田引水は論外として、しかし、事の本質がとらえがたい何かであるとすれば、移ろいのなかで、その移ろいそのものを記述するしかない、とモンテーニュは考えていた。だからこそ、死の床にまで「ボルドー本」をおき、加筆修正を施し続けたのだ。状況証拠のみでは犯人を断罪することはできない。しかし状況証拠は犯人を追いつめることはできる。このことがモンテーニュの「私」探求を支えていたはずである。

この小論では、「食人種について」という類稀な他者論における、小さな、ほんとに微細な事項の探求を試み、温厚で寛容、包容力豊かな、と形容されがちなモンテーニュ像にいささか意地悪な、厳しい側面が存在する可能性をつけ加えることになったが、十面相、二十面相の自己を十分に認識している探求者だけに、意外性を突きつけられた思いはいささかもないであろう。所詮、仏の掌の上であるが、さらに他の単語の異同を探求することによって、また別の可能性が出現することは否定できないだろう。

## 注

- 1) Trois d'entre eux, ignorans combien coutera un jour à leur repos et à leur bon heur la connoissance des corruptions de deça, et que de ce commerce naistra leur ruyne, comme je presuppose qu'elle soit desjà avancée, bien miserable de s'estre laissez piper au desir de la nouvelleté, et avoir quitté la douceur de leur ciel pour venir voir le notre, furent à Rouan, du temps que le feu Roy Charles neufiesme y estoit. [...] Je parlay à l'un d'eux fort long temps... (Puf: pp.213-

214) なお、*Essais*からの引用はすべてPuf版による。

2) J'ay eu long temps avec moy un homme qui avoit demeuré dix ou douze ans en cette autre monde qui a esté decouvert en nostre siecle, en l'endroit où Vilegaignon print terre, qu'il surnomma la France Antartique. (Puf: p.203)ここに記載のとおり、モンテーニュはその城館に「新大陸」の「南極フランス」と呼ばれる地方(現在のブラジル)に住んだことのある人物を雇っていた。自分で作り話をするのではなく、その目で見ただけの事実のみを素朴に語ってくれる存在として、この人物を大いに評価している。

3) Lopez de Gomara; *Histoire générale des Indes*などを参照している。

4) たとえば、T.Todorovの批判参照。 *Nous et les autres*など。

5) OCCIDENT (*Grand Robert*):

1. Littér. Un des quatre points cardinaux; côté de l'horison, point du ciel où le soleil se couche.

2. Cour. (Souvent écrit avec une majuscule; opposé à Orient).  
Région situé vers l'occident, par rapport à un lieu donné. Spécialt. Partie de l'ancien monde situé à l'ouest. ≪Que l'Orient contre elle à l'Occident s'allie.≫ (Corneille). -- (1690) (下線筆者) [...]  
Ensemble de pays d'Europe et d'Amérique du Nord.

3. Polit. L'Europe de l'Ouest, Les États-Unis...

6) Nina CATCH: *L'Orthographe française à l'époque de la Renaissance*. Librairie Droz, 1968.

7) Michel Eyquem de MONTAIGNE: *ESSAIS* *Reproduction Photographique de L'Édition ORIGINALE de 1580* avec une introduction et des notes sur les modifications apportées ultérieurement au texte en 1582, 1587, 1588 et sur l'exemplaire de Bordeaux publié par Daniel MARTIN. Librairie Slatkine (Genève) et Librairie Champion (Paris) 1976.

- 8) *Essais Reproduction en fac-similé de l'EXEMPLAIRE DE BORDEAUX 1588 annoté de la main de Montaigne*. édition établie et présentée avec une introduction par René BERNOUILLI, Vice Président de la Société des Amis de Montaigne. Edition Slatkine Genève-Paris. 1987.
- 9) *Montaigne Œuvres complètes TEXTES Etablis par Albert THIBAUDET et Maurice RAT Introduction et notes par Maurice RAT*. NRF Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade. 1962.
- 10) *Les Essais de Michel de Montaigne édition conforme au texte de l'EXEMPLAIRE DE BORDEAUX*, édité par Pierre Villey, Réédité sous la direction et avec une préface de V.-L. SAULNIER. Presses Universitaires de FRANCE. 1978.
- 11) *Montaigne ŒUVRES COMPLETES préface d'André MAUROIS de l'Académie Française. Texte établi et annoté par Robert BARRAL en collaboration avec Pierre Michel*. Aux Éditions du Seuil (L'Intégrale). 1967.
- 12) 当該部分のコピーを参照。◎印(筆者)のところに両語が見える。コピーは末尾に添付する。
- 13) 注1)をもう一度参照のこと。そこにはこうある。...comme je presuppose qu'elle (=ruyne) soit desjà avancée... 「私の見るところでは破滅はかなり進んでいる...」 (Puf: p.213)
- 14) 寺迫正廣: 「Essaisにおける事例蒐集の意義」 (『フランス語フランス文学論集』第39号pp.1-10) 1981年10月25日、日本フランス語フランス文学会発行。
- 15) 『エッセー』第1巻50章を参照。
- 16) 特に『エッセー』第3巻2章、同9章などに明らかだが、この思想は『エッセー』の全体にわたる基調音である。

